

わいわいひろば おすすめ絵本のたより

第7号 2026年1月19日 作新学院大学女子短期大学部



絵本の世界はつづくよ、どこまでも

作新学院大学女子短期大学部幼児教育科長
坪井 真

「ぼくは、かみの ぼうしを かぶり」という出だしで始まるマリー・ホール・エッツの『もりのなか』は、第二次世界大戦中の 1944年に米国で出版されました。日本では、1963年12月に初版が発刊され、2023年に第145版が刊行された超ロングセラーの絵本です。子どもの頃、この絵本を読んでもらい、お気に入りの一冊だったという方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

私自身は、初版発刊の約1ヶ月後、2歳の誕生日に両親が『もりのなか』を贈ってくれました。親の読み聞かせを経て、文字を理解できるようになった後、私は『もりのなか』を何度も読みました。

モノクロで描かれた森の中を歩きながら、主人公が動物たち(ライオンやゾウ、ウサギなど)と交流する世界は、幼い私にとって、新たな出会いを繰り返し経験する機会だったのかもしれない。

その後、社会人になってから、作者のエッツがソーシャルワークや社会的養護に携わっていたことを知り、幼児期から愛読していた『もりのなか』が自分の人生を支えているように感じました。

お気に入りの絵本は、年齢にかかわらず人生に寄り添ってくれます。多くの絵本と出会う機会は、お子さんの未来を開く扉といっても過言ではないでしょう。絵本の世界は、何処までも続きます。



「中をそうぞうしてみよ」

佐藤雅彦+ユーフラテス 作
福音館書店

この絵本は、福音館書店『かがくのとも絵本』の写真絵本です。身近なものを透かして見るとどんな風見えるか想像してみよう、という内容です。

例えば、椅子の写真を見て、この椅子の中には釘が何本刺さっているか想像します。次ページには、その椅子のX線写真があり、実際に椅子の中には何本釘が刺さっているのか分かります。

子どもたちの前で読み聞かせをして、「椅子には何本の釘が刺さってると思う？」と問いかけると、「2本！」や「いや、10本じゃない？」と楽しみながら真剣に答えてくれました。

大人は中身がどうなっているか大体想像できますが、子どもたちは、常識にとらわれず自由な発想で答えてくれたので、「ヘー！子ども達はこんなふう考えたりするんだ！」と、読んでいた私も楽しかったですし、子ども達もわいわい参加してくれたので、その場の一体感が生まれました。

みなさんのご家庭でもきっと、子どもならではの素敵な答えが返ってくると思います。興味のある方はぜひ手に取ってみてください。

2年 大橋摩季

「はんぶんこ」

多田ヒロシ 作・絵
こぐま社

私のおすすめする本は、多田ヒロシさんの『はんぶんこ』という絵本です。この本は、パンダ、ブタ、犬、ワニ、ゴリラがそれぞれ好きな食べ物をはんぶんこしていくお話です。

私は保育園で、1歳児の子どもたちにこの絵本の読み聞かせを行いました。食べ物の話ということもあって、給食の前に行わせていただき、実際に読み始めると、次々に出てくる動物や食べ物を「ワンワン！」「バナナ！」と言いながら指差しをしたり、はんぶんこの方法やその結末に笑顔を見せる姿が見られました。

この本は、「はんぶん」が言えるようになった子や、わけっこするのが嬉しくてたまらない子、「はいどうぞ」「ありがとう」のやりとりができるようになった子、できそうな子などに読み聞かせすることで、「はんぶんこ」という言葉や意味に更に興味を示してくれるのではと思います。

2年 岡田歩乃佳



- ❖ 作新学院大学女子短期大学部で保育を学ぶ短大生達がおすすめの絵本を紹介します。
- ❖ 今年度は、わいわいひろば内にてキッズスペースを設けています。
- ❖ 作新学院大学図書館で、一般の方も絵本や本を借りることができます。
- ❖ 手続き方法などをお知りになりたい場合は、お気軽にスタッフまでお声かけください。